

## 南スーダンで活躍中の国連職員と1時間

総合政策学部  
2期生 **野副美緒**さんが語る

# ミッションと パッションの間

野副美緒さん。現在スーダンで活躍する「UNオフィシャル」——国連職員である。

1998年中央大学総合政策学部卒。総政2期生だ。

この4月、一時帰国した足でふらりと母校・多摩キャンパスを訪れた。

災害や飢餓にあえぐ世界の最前線、そこでの国連スタッフの日常とは？

野副さんはきらきらした表情で多くを語った。

学生記者 猪瀬智巳(商学部4年)

小麦色の肌。真っ直ぐな黒い髪。

すらっとした手足。年齢よりも若く見えた。ちなみに、31歳。「トシを書くの!?」と軽くニラまれたけれど。

現在は南スーダンに在住。国連世界食糧計画(WFP/本部・ローマ)のミッションで他機関・団体のスタッフとともに、約194万人に対する食糧援助のプログラムを実施している。

「現地では、けっこう人気者みたいですね——彼女のブログ(<http://blog.drecom.jp/mioniomionio>)でスーダンの日々を拝見した印象を話してみた。

「あなただって、こちらへ来たらそうなるわよ。ミッキーマウスが来た!! みたいな感じ? 南スーダンには娯楽がないからね」

そんな、打ちとけた語り口。とたんに空気が丸くなった。

### 虐殺と飢餓のスーダンにて

スーダンでは、20年以上にわたつ

てアラブ系住民とアフリカ系住民との間で内戦が続いた。1983年以降イスラム原理主義の台頭から武装対立が激化し、スーダン政府が支持するアラブ系民兵によるアフリカ系住民の虐殺や迫害が国際問題にも発展した。とくに2003年から現在も虐殺などが止まないスーダン西部のダルフル地域ではすでに20—30万人が殺害され、難民は200万人とも。NPOの報告などには、その様相から民族浄化を意図した「ジェノサイド」(大量虐殺)という表現もみられる。この5月には、難民キャンプで食糧配給をめぐる住民の一部が暴徒化し、国連のジープが襲われるニュース映像が日本でも流れた。

2005年1月内戦を終結させる南北包括和平合意が成立したものの、国内全体ではこの間死者200万人、難民は数百万人に達するとされる。

野副さんがWFP職員として南スーダンに入った当初(06年3月)も「町の中心部ですら地雷の危険があり、

戦車が転がって、村の人が住居にしている小屋がポツポツ建っている他はなんにもない状況だった」という。

## 食糧配給「ウォーリーをさがせ」

南スーダンでの課題は飢餓の問題——食糧と水だけではない。コレラや感染症で人が死に、満足な病院施設や学校もない。乾期は雨がほとんど降らないので水不足になり、雨期が始まれば道がぬかるんで移動ができなくなる。水の確保のために働くのは女性だ。「40キロくらい平気で歩いて、水を汲んで、またその距離



### パッションネートに語り

端じやなく、そこらじゅうが人だらけ。配給場所はまるで「ウォーリーをさがせ状態」なのだそう。誰がどこの村の人なのかなんてわからない。これでは、予め地域のリーダーの意

を帰って、の繰り返し。向こうの人はよく歩くんですよ、本当に」。40キロというと、八王子から東京駅くらいまでの距離。そんな距離を、歩くんですか？ 本当に？

食糧援助は通常は1カ月に1度、道路が使えなくなる雨期の直前には3カ月分の配給を行うのだという。「大きな課題は誰に優先的にあげればいいかということ」。1日に数十キロ歩いてしまう人々。配給先の村から村へと、食糧を求めて歩いてきてしまう。加えて少し前まで紛争の現場だった南スーダンでは住民登録というものがない。人の多さも半

見を元に用意された人数分の食糧では当然足りなくなる。

途中、人数が多すぎてけんかが大発生。／にちもさつちも負えなくなつて鍵をしめて、食糧配給中止。後日再開予定。何時間も待つて、何ももらえない人の波の真ん中を／車で走り抜けるのは、胸が痛い。ごめん（野副さんのブログ「消化物展示場」より）

また、政府の担当者が食糧をくすねているという疑惑も時にあるらしい。「確認する前に証拠がうやむやにされて食糧がなくなつたり、人々がワーツと来て持つていっちゃったりする。政府の役人が国からちゃんと給料をもらっていないかったり、警察がいなくて、とにかく社会のシステムも人々のモラルも長い紛争を経て崩壊してしまっていますから、問題の根は深いのです」。そうやって、野副さんは腕を組みなおした。今は一般食糧配給の対象は女性、避難民だ。徐々に対象者を狭めてい

く。永遠に援助し続けるわけにはいかない。自立を促すことができないれば援助は意味がないどころか、害になる。

現地では、木を切り、畑を作り、スタッフ15人がテントで暮らしている。「夜は外に出ないように」と指示されたという。「出て行くところがないんですけれど（笑）。その夜、遠くで銃声が聞こえた。戦争の影響は消えていない。「全てを一から作り直す時期です」と続けた。

### メモが追いつかない

滑舌。切れ目なく話は続いた。とてもメモが追いつかない。「速かつたら言ってくださいね」と優しいのだけれど、まるで歯医者さんの言葉みたいだ。「痛かつたら手を上げてくださいね」……。手を上げてどうなるものではないし、話を止めるのはもつたない。聞き逃せない、もつと聞きたい話が次から次へ、なのですから。



### 明るく笑い

年生ではオリンピックのボランティアもやった。そんな延長線上で就職活動では、「激動の世界の前線にいたい」とマスコミを受験したが、新聞社の内定をもらう直前の、健康診断で引っかかった。

### ターニングポイント

表情も豊か。身振り、手振りを交えて、ころころとよく変化した。もともとは「舞台女優志望」だったと聞いて、なるほどナ、というわけである。大学受験と同時に、俳優座も受験した。中央大学入学を決めたのは「大学に入っても（演劇は）できるじゃないの」という母のちよつとした一言だったそうだ。

大学1年生前半のほとんどは演劇の練習に費やし、外部の舞台も踏んだ。探検部に所属。神戸の大震災でボランティアに初参加。2年の時に中国を一人旅し、3年次、中米、インド、アフリカ、イランを回る。4

「受かる受からないよりも、あなた、すぐに病院に行ったほうがいいわよ」と言われ、病院に行くと即入院。結局4カ月病院にいた。腎臓が壊れた。振り返る。「あれぐらいないと自分はずつくりできなかった」と。大きなターニングポイントとなった。

「いままでやりたいことは全部やって、人生上り調子だったのがここでがくんと落ち込んだわけです。よ。みっちり自己分析をする時間が

ありました。治った今になってみれば腎臓壊して本当によかったって言えますけれど、あの時はへこみましたねえ」

入院生活では、人の死を身近で感じた。同室のおばさんが具合が悪くなるにつれて病室がナースステーションに近づいていく。いつの間にか見慣れた名前がプレートから消えていた。「頭じゃなくて、心で実感したんですね、人は死んでいくんだ、ということを」

大学卒業後は緊急援助のNGOの仕事をした。01年英国の大学院修士を修了。03年国連職員に。

死者18万人、行方不明者4万5000人以上にのぼったインドネシア・スマトラ島沖地震・津波が起きたのは04年12月26日である。そのとき、野副さんはスリランカにいた。スーダンに赴任する前である。スリランカでも3万5000人を超える死者・行方不明がでるほどの惨状を

呈した。野副さんは、直後ただちにスリランカの東海岸アンパラに入って、WFPの現地オフィスを設立して緊急援助に挺身した。

「鼻息荒く『仕事をやります！』と思っても、政策レベルでは仕事を始めて2年目の私ごときペーパーじゃ何もやることはない。上司に掛け合って首都のオフィスから最前線に出してもらいました。3カ月近く、文字通り土日休日全くなくノンストップで、人の話を聞いて、被害地を歩いて、食糧の手配をして、朝から晩まではたらきました。地道で疲れるたいへんな時期でしたけれど、自分がやりたいことの原点はここだ！と思えた。人のために、人と一緒に、いいものを創る仕事。自然の脅威、人間の弱さ、強さ、美しさ、醜さが渦巻く中で、それでも何か希望をもって『次の時代』を創っていく仕事、私はこの道を進んでいこうという静かで確かな自信をもてたのがこのスリランカの2年間でした」

## 自分探しではなく自分構築

「一番言いたいことをひとつ、なの？」

野副さんが困ったような顔になった。

気づくともう約束の1時間を過ぎていた。次のスケジュールも気になって、最後に、と持ちかけたのですが。

「ひとつじゃなくてもいいですよ」

「ひとつにつき1時間はしゃべれちゃうから」

メッセージが体中にあふれている感じなのである。では、一言ネ、と座り直して――。

「ボランティア活動は長いスパンで考えてほしいです。何もできないからといって引っこまないで、時間をかけて吸収したものを、また長い時間をかけて社会に返していけばいい。でも、いつまでもボランティアではなくて、いずれは自分のフィー

ルドで、プロとして自分の社会への関わり方を確立させなければいけないと思います。大学時代は、自分の根をどこ

にはるか

を模索す

る時期。

20代前半

はやりた

いこと全

部やって

みていい

と思う。

中ごろま

でに徐々

に『不必要なもの』『感性のアンテナにひっつかからないもの』をそぎ落と

としていつて、30歳はフィールドを

確立させる修行期間。本領発揮でき

るのが35歳くらいからです」

言いたいのは、と続けて、

「やみくもな自分探しじゃなくて、

自分を構築せよ、ということ。自分

は探してみつかるものじゃなくて、

作っていくのだということ。今は無理に思っても10年というスパンではいろいろできちゃうものなのよ」

進路を決めるときは、

いつも人生の選択をせま

られているような気にな

る。まして4年生ともな

ると、なんだか不安。で

も、背筋をシャンとして、

焦らず、ねばり強く、と

いうアドバイスが、じん

と伝わってきた。繊細で

ありつつへこまない、そ

んな国連職員のプロ精神

もすっかりと。

### 恋人のビルジリさんと仲良く

### フランス人の恋人伴って

4月15日から22日まで、一週間の

日本帰国は「妹の結婚式に出席する

ため」。姉・美緒さんはフランス人

の恋人を伴って式に出席した。ジュ

リアン・ビルジリさん。年下の27歳。

スリランカで出会ったフランス赤十

字社のスタッフだという。3年ぶり

の大学訪問もふたり一緒だった。ビルジリさんはいまもスリランカ在。スーダンとは遠く大陸と海をまたいで……。

「親はびっくり？ ううん、もう

驚かないみたい。そのたびに相手が

変わっていたりしなければ大丈夫で

しょ……ハハハ」

茶目つ気たっぷりに、明るく笑った。

母校訪問の日のブログも引用した

い。

「さて彼氏連れで母校に来るって

のは、彼曰く／「僕、おまけみたい

だよ」で、まあその通りなだけ

れど／まあなんというの、ハナツカ

ラ縄張り外の銀座とか表参道とか気

取って／ウィンドウショッピングす

るより／私の青春時代の舞台にご招

待したいのだ。／「過去はとうの昔

に忘れたわ」というには、／私には

素敵なしがらみがいっぱいありすぎ

る▽

4月17日付、題して「今昔物語」

とあった。